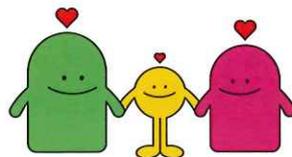


争い続ける世界の中で子供たちに残す平和

松浦悟郎さんのお話し



「ピース9の会」、「宗教者9条の和」、「9条の会・大阪」の呼びかけ人。

1981年上智大学神学部卒業。カトリック名古屋教区司教。

「日本カトリック難民移住移動者委員会」委員長、「子どもと女性の人権擁護デスク」担当。



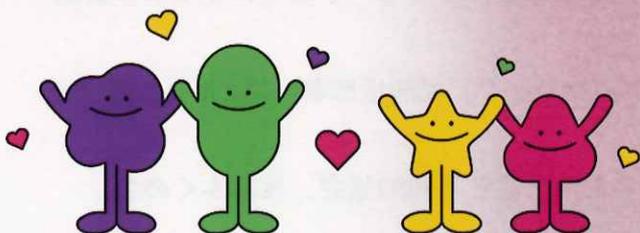
NOW IS THE TIME
TO CHOOSE!

2026年3月7日(土)

15時～16時半 (開場14時半)

場所 カトリック鶴岡教会天主堂

参加 ¥500・学生無料



問い合わせ：漆山 080-6027-9450

主催：ピースナイン/大松庵の会、つるおか正義と平和勉強会、民宿ふくの会

人間の真の「現実」に応える思想としての憲法9条

「現実をわかっていないお前は甘い、と言われたくなくて、現状追認に走っている…しかし、現実がこうである以上、こうするしかない、と言う言説は、結局、人を苦しめ搾取や暴力を生み出すだけです。

……人間は“なぜ”と問う生物です。“どうやって”だけでは人間ではない」

哲学者 佐々木中氏の言葉

例えば、最近の情勢の中で憲法9条の大切さを伝えようとする、
「現実には甘くない」とか、「しょせん理想よ」などと言われ、自分が何かうかと、たじろぐ人も少なく
口安吾が、「お前は甘いぞは骨身にこたへる一大射た言葉だと思えます。
の間にか「現状」と事力を高めているから、人間らしい問いかけも確信も流されています。
がり、安易な武力最近、特にアジアでと問い、戦争の歴史の防いで平和を築いていけるかをよく
ます。それこそが、人間や歴史の真実から学んだ「現実的な対応」と言えるのです。



現実からかけ離れたことを主張しているだけだろ
ないのではないのでしょうか。かつて、坂
と言われることが、我々日本人にとって
苦痛」と指摘したとのことですが、的を
多くの方は「現実」という言葉を、いつ
いう意味でとらえてしまい、「隣国が軍
我々も軍事力で備えよう」などとそこに
なく、現状に反応しているだけの言葉に
その傾向がいつの間にか漠然とした世論に広
行使容認へとつながらないとも限りません。
緊張が高まっているという状況に対して「なぜ」
記憶から学ぶことは大切です。何が武力衝突を
吟味し行動する、もっとも必要とされていることだと思

誰もが戦争することは望まないし、平和を願うのは当然です。しかし、もし、
実際に行われる戦争に反対するならば、その道を歩み始めたときにも反対
しなければ、「その時」では遅すぎて誰も止めることはできません。

戦争は一夜にして起こるものではなく、長い月日の中での他国との
関係悪化、軍事力の増強、国民の意思統一、法律の改定などの戦争
準備があつてはじめて「戦争ができる状態」になるのです。本当に
戦争反対ならば、今、確実にその方向に向かっている日本の政治の
流れに声をあげないと手遅れになります。

また、同じ平和という言葉を使いながら、「国民の財産と生命を守るため」
あるいは「国の自由と平和を守るため」という理由で他国にまで出かけて
いって戦争する場合もあるのです。何が欠けているのでしょうか。それは、

人間の尊厳や平和を自国民に限定してしまい、人類のだれに対しても適用されるべきもの、すなわち普遍的なものであるという土台に立っていないところから来るのです。

「平和をつなぐ」松浦悟郎著 ドン.ポスコ社より

